

## 医学部新生を対象としたグループ学習授業科目における 教員 20 名の協働と ICT 環境の活用

### Cooperation of Twenty Faculty Members using ICT in the Group Learning Course for New Medical Students

坂田 信裕<sup>\*1</sup>, 坂東 宏和<sup>\*1</sup>, 山下真幸<sup>\*1</sup>, 上西 秀和<sup>\*1</sup>  
Nobuhiro SAKATA<sup>\*1</sup>, Hirokazu BANDO<sup>\*1</sup>, Masaki YAMASHITA<sup>\*1</sup>, Hidekazu KAMINISHI<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> 獨協医科大学情報教育部門

<sup>\*1</sup> Division of Information Literacy Education, Dokkyo Medical University

Email: nobus@dokkyomed.ac.jp

あらまし：医学部新生が、能動的・自律的な学びの必要性を認識し、身につける機会とするため、2015年度から「スタディスキルズ」科目を導入した。グループ議論、事前・事後学習へのフィードバック、授業時のアドバイス、さらに学生評価を含め、きめ細かな指導を行うため、約 20 名の教員が関わる授業デザインとした。学生・教員間、教員間、学生間の情報共有などに、LMS を始めとする ICT 環境を積極的に活用しており、2 年目に取り組んだ改善を含め、その取り組み内容について報告する。

キーワード：グループ学習、アクティブラーニング、ICT 環境、教員

#### 1. はじめに

本学医学部では、教育改善を目的にカリキュラムの再編とともに、授業時間を 90 分間から 60 分間とする取り組みが、2015 年度から始まった。これに伴い、午後の講義時間の終了時間が 50 分ほど早くなり、木曜日の午後には基本的に講義のない授業編成となった。これは、事前学習や事後学習を行う時間を設け、学生が、より能動的、自律的な学びを行うことを考慮した取り組みである。

このカリキュラム再編・授業時間短縮の実施においては、医学部の新生に対しても、対応が必要と考え、新たな科目「スタディスキルズ」を 2015 年度に導入・追加した。この「スタディスキルズ」科目（全 11 コマ）は、グループ学習を主とする授業デザインを用い、授業内容の検討はワーキンググループが行った。さらに、授業時のグループ（学生 4~5 名で構成）を担当する教員も合わせ、教養系の教員、約 20 名が関わる授業科目となった。

2016 年度も、前年度の結果・振り返りをもとに改善を試み、教員 20 名が関わる授業を実施した。今回、このような人数の教員が関わる授業において、どのように協働し、さらに ICT 環境を活用したかを報告する。

#### 2. スタディスキルズ科目概要

スタディスキルズ科目では、新生が、入学直後の時点で、事前学習・事後学習と実際の授業で、学びのサイクルを体験し、学び方を学ぶスタートアップの機会としての意味を含ませている。また、授業では、学生 4~5 名のグループでの議論をできるだけ多く取り入れることを考慮した。そのため、1 年生約 120 名を 2 クラスに分け、それぞれ別の日程に授

業を設定した。また、各クラス約 60 名をさらにグループ化し、それぞれのクラスを 2015 年度は 15 グループ、2016 年度は 13 グループとなるように調整した。授業は主にグループ活動での授業を前提として設計したコンピューター教室において行った。事前学習と事後学習だけでなく、授業時のグループ内およびクラス全体の情報共有基盤として、LMS（学習管理システム）を積極的に活用する手法を用いた。LMS の機能としては、主に配布資料機能、アンケート機能、レポート機能、お知らせ機能、掲示板（フォーラム）機能を用いた。

また、授業は、グループごとの小さなセミナー室等で行う形式ではなく、クラス全体が入る教室にて行う TBL (Team-Based Learning)<sup>(1)</sup> の授業デザインや要素を取り入れて行った。しかし、大きな違いとして、TBL は基本的に少人数の教員による授業であるが、スタディスキルズの授業では、1~2 グループに教員 1 名が支援者として担当する形式とした。

また、科目全体の細かな設計をするため、2015 年度の授業のために、ワーキンググループ（7 名構成）を作り、そこでの検討を経て作成された授業内容を用いて授業が行われた。いくつかの授業形態が含まれたが、事前学習を経て、授業に臨み、グループ議論を行い、授業後にはまとめを含む事後学習を求める形で行った。

#### 3. ワーキンググループと活動内容

2015 年度の実施結果から、スタディスキルズの科目を導入したことによる利点や課題点が明らかになった。課題点としてもいくつかの項目が挙げられたが、教員の関わり方についてもその一つであった。

2015 年度のスタディスキルズ授業では、ワーキンググループメンバー間では協働が行われたが、役割

分担の偏りが課題点として考えられた。さらに、他のグループ担当教員との間では、ワーキンググループからの一方向的な情報提供が主になってしまい、グループを担当する教員が、どのように自ら関わることが望ましいのかについて、明確な議論ができなかった。そのため、授業でのグループ支援のレベルの差が発生してしまうことが見受けられた。そのため、2015年度の授業には、約20名の教員が関わる協働の体制として、改善の余地が多く見られた。

このような結果を踏まえ、2016年度では、教員の関わり方についての再検討も行われた。まずは、ワーキンググループにおける活動の見直しを行い、役割分担をより明確にするとともに、ワーキンググループメンバー全員(8名)で、授業を構築していくことを目指した。メンバーは、前年度にワーキンググループのメンバーとして活動した教員と、グループのみを担当した教員で新たに構成された。

#### 4. 各グループの担当と支援

グループ担当の教員の役割として、前年度の授業では、明確な役割提示ができなかったため、課題点の一つとして取り上げられた。2015年度では、グループを担当する教員が、同じクラスの中で2つのグループを受け持つことが数名の教員で発生した。そのため、2つのグループ間を教員が行き来するため、グループ内の議論状況の把握や授業支援が難しくなることがわかった。また、学生からも、教員の支援の程度に対して改善を求める意見がみられた。

前年度の結果を踏まえ、2016年度のワーキンググループでは、授業中に各グループの支援をより密接に行うための方策を検討した。その一つの方法として、教養系教員の協力のもと、各グループを1名の教員が継続して担当する方式へと改めた。

これにより、各クラスとも全グループにそれぞれ担当する教員が付いたことで、以下の取り組みが可能となった。1つは、事前課題と事後課題の学生による提出物への対応である。とくに、事後課題の一つとして、毎回200文字での授業の振り返りをLMSのレポート機能を用いて提出させたが、2016年度は、その文章の添削を各グループ担当の教員が行うことにした。学生の適切な文章を書くという技能的な練習とともに、その文章に対する添削結果を学生へフィードバックできる良い機会になると考えた。そのため、時間的な制約はあったが、授業時間内にフィードバックを行う時間帯を設け、文章の書き方に関する指導を各グループ内で行うことが可能となった。また、事前課題の提出内容を授業前に把握しておくことで、議論に用いる資料の理解や認識をある程度、グループ担当教員も把握することができる。そのため、議論の際には、その情報をもとに支援をすることが可能になると考えられた。

もう1つは、授業時間内のグループへの細かな指示や、議論をする際の支援である。前年度の授業で

は、この部分への対応が不十分になっていたことから、改善が期待された。

これらのように全てのグループに一人ずつ教員が担当することで、授業時間内外の支援を行うことが可能と考えられた。授業全体の終了後の学生へのアンケートでも、各グループに教員1名がいたことに対し、大変良いが59%、ある程度良いが38%との高評価が得られた。

#### 5. ICT 学習環境の活用

スタディスキルズの2年目において、ワーキンググループの役割や取り組み方法の見直しを行い、また、各グループを担当する教員の授業への関わり方を見直しを行ったが、LMSを始めとするICT環境の積極的な活用も寄与したことが考えられた。

2015年度においても、LMSを活用したが、検討においては限定的な利用に留まっていたと考えられた。しかし、2年目においては、ワーキンググループで実際に議論したことを踏まえた内容をLMSやメールを活用して情報共有され、疑問の解消や、お互いの刺激につながっていたことが推察された。また、教養系教員全体で集まる教育ワークショップの開催時にも、各グループを担当する教員へ、この授業への関わり方や、考え方をより適切に伝えることができ、さらにLMSやメールなどによるタイミングを考慮した情報共有が行われた。そのため、様々な分野にまたがる20名の教員たちが、協働して授業に臨んでいたことが観察された。

#### 6. まとめ

今回、2年目として実施した「スタディスキルズ」の授業において、教員がどのように関わったかをICT環境の利用を含めて報告した。2015年度の実施結果をもとに、改善を行い、20名の教員がICT環境の活用を含めて、協働して授業に取り組むことができたと考えられた。

#### 参考文献

- (1) 三木洋一郎, 瀬尾弘美: “新しい教育技法「チーム基盤型学習(TBL)」”, 日医大医会誌 Vol. 7, No. 1, pp. 20-23 (2011)